

# Civi-note 32

し び の 一 と

高松市美術館  
ボランティア通信  
2016年4月1日発行

## 誌上ギャラリートーク

## 展覧会のみどころ！

高松市美術館は1年余りの改修工事を終え、2016年3月26日にリニューアルオープンとなりました。それを記念し、3月26日～4月17日、「高松市美術館コレクション展—今知りたい、私たちの『現代アート』」を開催し、国内外から高い評価をいただいている日本の現代アートコレクションから、選りすぐりの名作約110点を紹介。ここではその中から、特におススメの4作品をご紹介します。



田中敦子《電気服》1956年(1986年再制作) 高松市美術館蔵  
©Kanayama Akira and Tanaka Atsuko Association

### 田中敦子《電気服》 世界を旅する人気作品。

これは、一体何？ 当美術館一番人気の作品、「電気服」です。国内外の美術館への貸し出し回数がなんと10回以上。世界中を旅しているのです。

本作は1986年に再制作されたもので、オリジナルはその30年前(1956年)に作られました。当時、作者の田中敦子は関西で結成された前衛美術グループ「具体」に所属しており、舞台の上で何か変化する服を作りたいと考えていました。たまたま駅のベンチでネオンの広告が点滅するのを見て、その眩さに、「ネオンの服を作ろう！」と思い付いたそうです。

それから、試行錯誤の末、1年かけてやっと大量の電球が点滅するこの作品を完成させました。その時は、タイトルは無く「点滅する電球で作った「衣服」と称する作品」と紹介されただけで、特に注目もされませんでした。翌1957年、舞台での発表の機会を得て、自らこの電気服の中に入りパフォーマンスを行い、大きな注目を集めたそうです。(さぞ熱かったことでしょう)が、それもつかの間、まもなく解体されてしまいました。

1980年代になり、海外から日本の前衛美術に対する関心が高まり、この電気服もよみがえったという訳です。今から60年前にこのような迫力ある作品が作られていたとは驚きです。 [植松紀子]

### 高松次郎《影の圧搾》 影絵サスペンス劇場。

「影」は私たちにとってとても身近な存在です。子どもは自分の分身ともいえる自らの影を追いかけたり、夕日で長く伸ばされたその姿に畏怖の気持ちを抱いたり、身近でありながらミステリアスな影のことが大好きです。しかし、大人の中のどれだけの人が影に関心を持っているでしょうか？

高松次郎は、影という存在に魅了され、大変ユニークな影の連作絵画を描いた、稀有な大人であったと言えるかもしれません。

本作では、白い背景にハンドバッグを持った女性と椅子の影が入れ子状に繰り返して描かれています。高松の影のシリーズは、影のみで描かれているため、具体的なシチュエーションが不明であり、逆に見る者のイメージネーションをかき立ててくれます。きわめて複雑な構造を持つ本作は、さながら推理小説のような様相を呈しています。

影踏みや影絵などを通して子どもの頃に感じた影の不思議さや面白さを、高松の影のシリーズは思い出させてくれます。作品の前で、影が作り出すミステリアスな世界に浸ってみませんか？

[石床亜紀、牧野裕二]



高松次郎《影の圧搾》1965年 高松市美術館蔵  
©The Estate of Jiro Takamatsu, Courtesy of Yumiko Chiba Associates

## 12/19

出張！アートで遊ぼう！①「雪を降らせよう！」

(講師：美術館スタッフ／瓦町FLAG8階IKÔDE瓦町)

アシスタント

IKÔDE瓦町クリエイティブルームで行われた出張ワークショップ「雪を降らせよう」では、子どもたちの熱意によって大雪を降らせることに成功！！その雪の正体は実は様々な風合いの白い紙。子どもたちは大量に用意された何枚もの白い紙をひたすらハサミで切ったり、手でちぎったりしながら、同じ「白」でも素材によって微妙に色味が違うこと、また紙にはちぎりがしやすい方向、ちぎりにくい方向があることに気づいたようでした。そしてそれらたくさん雪を集めて部屋中にまき散らしたり、雪道を作ってみんなでサクサクと行進したりして、真冬でもなかなか体験できない大胆な雪遊びを満喫しました。思う存分降らせた雪たちは、色とりどりの布とリボンでラッピングされ、子どもたちそれぞれのお家で楽しい思い出とともに寄り添ってくれていることと思います。 [坂口弘子]



## [2016年] 1/30

出張！アートで遊ぼう！②「虹と遊ぼう！」

(講師：美術館スタッフ／瓦町FLAG8階IKÔDE瓦町)

アシスタント

虹の中に入って遊んでみたい。一度はそんな希望を持ったことはないでしょうか。今回の「アートで遊ぼう！」ではそんな希望を叶えようと、虹色の部屋作り挑戦しました。アクリル絵の具で波線や丸、四角やハートの虹をみんなで手分けして塗るのは一苦労。それでも大きな刷毛で鮮やかな虹を描き出すのは新鮮な体験になりました。最後に虹の部屋を組み立ててみんなで記念撮影。美術家・鰐嘔(あいう)の作品のように7色の世界に引き込まれる空間が完成しました。 [高松市美術館 翠さやか]



## 3/5

プラス  
こども+ (こどもアートスペース) 開室記念ワークショップ

「看板を作ろう！」

(講師：画家・福井秀巳氏／高松丸亀町三町ドーム)

アシスタント

美術館リニューアルオープンが近づいた土曜日、美術館近くの商店街で、新たに開設される「こども+ (プラス)」の看板作りを道行く人にお手伝いしてもらったワークショップが開催されました。指導してくださったのは、画家の福井秀巳さんです。色々な木のパーツを貼り合わせて、「こども+」の字を作っていたら一つ一つに、親子連れのお子さんにクレヨンで絵や字を思い思いに描いてもらいました。自分の描いたものが、ずっと美術館に看板として残るとあって、子どもたちは大喜び。その他、美術館で今まで開催された展覧会のポスターを使って手さげバッグを作るワークショップも実施。とってもお洒落なバッグができて、皆大満足のようでしたよ。 [植松紀子]



## 編集後記

◎待ちに待った美術館リニューアルオープン、1999年秋に「ハーバード大学美術館展」でciviが初めてギャラリートークをしてから、このコレクション展が80回目のギャラリートークとなります。何でも右から左へと忘却の達人の私ですが、80回全ての展覧会で何かの作品とその作品にまつわるエピソードを覚えてます。慣れて気を抜かないよう、美術館と共に頭もリニューアルしなければ…と思っています。 [池田幸子]

◎美術館が再開しました。また色々な作品や人々に出会えるのを楽しみにしています。 [石床亜紀]

◎美術館を出ての出張ワークショップは、とても新鮮でした。ポスターを使ったオシャレな紙袋、また作りたいナ〜。 [植松紀子]

◎待ちに待った山口晃さんの対談の日。並びました、整理券配布の行列に。そして、GETしました！2列目です。甘いマスクの平成の絵師は、その作風のままの、まことに軽妙洒脱なお方でございました。 [坂口弘子]

◎3月26日高松市美術館は無事リニューアルオープンを迎えました。こけら落としのコレクション展に続き、エッシャー、ヤノベケンジ、コンテンポラリーアート・アニュアル、タリ版画、北原千鹿、と多彩な展覧会が続きます。瀬戸内海の島々では春・夏・秋に瀬戸内国際芸術祭2016も開催されます。今年は香川のシマと新しくなったハコでアートを満喫してください！ [高松市美術館学芸員 牧野裕二]

## 活動報告

[2015年] 10月～[2016年] 3月 civiの主な活動

### 10/31 ワークショップ

「はじめてアート・色で遊ぼう！」

(講師：芸術士・谷由貴氏／瓦町FLAG8階IKÔDE瓦町)

アシスタント

皆さんも子どもの頃、たくさん絵を描いた思い出があるのではないのでしょうか。今回のワークショップは、芸術士・谷由貴氏を講師にお招きし、色画用紙に絵の具・クレパスで自由に絵を描いてもらい、折り紙・マスキングテープを使ってデコレーションしました。シンプルな活動内容ですが、ルールを作らず、子どもたちの思うがままに制作してもらったので、色や素材の違いを楽しみながら、一人一人の個性が活かされた、のびのびとした作品が完成しました！ [高松市美術館 笠井麻優美]



### 11/28 トーク&ワークショップ

「アートを使ったりハビリを体験しよう！」

(講師：かがわ総合リハビリテーションセンター・大野香織氏、橋本千代美氏／瓦町FLAG8階IKÔDE瓦町)

アシスタント

今や本屋に行かずとも本が買え、本を買わずとも読める時代。幅さん曰く、「たとえ立ち読みでも読んで戻し読んで戻すという微熱が堆積することが大事、人が本屋に来ないのならばこちらから…」と、ホテルや空港、学校、病院や動物園など異業種の現場に向いて企画冊をつくる仕事をされています。本屋ではジャンル別、出版社などに分けて置かれる本ですが、そういう枠をはずし、あるテーマを元に本棚を再編集する…ジャンルも年齢もこだわらず、小説、絵本、専門書、写真集、アートブックからマニア本、漫画に至るまで…「あれ、なんでこれがここにあるの？」という良いつまづきを作り、人と本にもう一度良い出会いを、というお話でした。

さて、話の後は高松市美術館に新設される「こども+」のスペースに実際に置く本を皆で選ぶということで、参加者全員ひとつずつテーマを決めて階下の図書館へ行き、ひとり3冊ずつ本を選び発表しました。「人に本を選ぶなんて余計なお世話、その迷惑が親切に変わる瞬間が選書のベースにある」という言葉を聞いて、私たちのギャラリートークもそこを目指したいと思いました。 [池田幸子]



〒760-0027 香川県高松市紺屋町10-4 Tel: 087-823-1711 Fax: 087-851-7250

発行：高松市美術館 編集：civi & 牧野裕二(高松市美術館) デザイン：福田千恵(高松市美術館)

Before → After  
**ビフォーアフター！高松市美術館** [高松市美術館 牧野裕二]



ニャー太

高松市美術館が  
**リニューアルオープン**したんだって！  
 ハカセ、どこが変わったのかおしえて！

まずは歴史のおさらいじゃ。  
 高松市美術館は**1949年**、**高松市**の**名勝・栗林公園**の中に  
**戦後初の公立美術館**として**オープン**し、  
 その後**1988年**、ちょうど瀬戸大橋が開通した年に、  
**市街中心部の今の場所に移り、**  
**新築オープン**したのじゃ。



ムッシュ・ハカセ

それから28年、石とガラスからなる  
**シックで落ち着いた雰囲気**は残しつつ、  
 内装に**木材を多用**したり、  
 照明を全面的に**LED**に変えるなどして、  
**明るく開放的でぬくもりのある**  
 雰囲気もプラスされ、  
 気持ちのいい空間が創出されたのじゃ！

Before → After



まずは外観の  
 ビフォーアフター  
 写真を見てみようか。



しょーじき、外側はぱっと見、あまり変わった感じはしないですね！  
 でも・・・うむむ！**赤い船の帆のようなモニュメントが、**  
**TAMの文字をかたどった黒いもの**に変わっていますね！

ニャー太よ、  
 よくぞ見つけたな！

そう、このTAMのモニュメントは、  
 瀬戸内国際芸術祭のポスター類や  
 「無印良品」のアートディレクションを手がけている  
 原研哉さんによるもので、  
**Takamatsu Art Museum**の頭文字を  
 高松のシンボルタワーや島などに見立てて  
**デザイン**したものなのじゃ。  
 ほかに館内のサイン全般を  
 原さんにデザインしていただいているのじゃ。



**TAM** 高松市美術館  
 TAKAMATSU ART MUSEUM



すっきりとしたいいデザインだね！  
 あと石で覆われていた床や階段の一部が  
**芝生**になっているね！

そう、美術館の周囲に  
 芝生のゾーンが作られたのじゃ。



5月頃には  
 もっと青々とした感じに  
 なるそうじゃ。



森村泰昌《だぶらかし(マルセル)》

森村流なりきり美術鑑賞術。

森村泰昌さんは名作絵画や有名女優に自身の身体を忍び込ませるセルフポートレート  
 作品で知られる美術家です。森村さんが世に知られるようになったきっかけの作品として、  
 1985年の《肖像(ゴッホ)》があります。その中で森村さんは耳を切り落とした後の痛々しい  
 包帯姿のゴッホになりきっています。

それではこの《だぶらかし(マルセル)》(1988年)ではいったい誰になりきっているの  
 でしょうか？「20世紀最大の芸術家」と言われるマルセル・デュシャンです。そのデュシャン  
 がローズ・セラヴィなる女性の人格を演じている姿を写真家マン・レイが撮影した写真  
 があります。本作はそれをさらに森村さんが真似たものなのです。手、帽子が2個ずつ、  
 さらに男と女など重なり構造がタイトルにも表現されています。

このように「なりきる」ことが森村さん流の美術へのアプローチなのです。「美術鑑賞」が  
 苦手だった若き日の森村さんの編み出した必殺ワザ！？なののでしょうか。どうぞ謎解き  
 の気分、隔々までご鑑賞いただけたらと思います。 [坂口弘子]

森村泰昌《だぶらかし(マルセル)》1988年 高松市美術館蔵

須田悦弘《チューリップ》

神出鬼没のチューリップ。

高松市美術館では既に何度も、意外な場所に登場して人々を驚かしてきたチューリップ。  
 作者の須田は他に雑草の作品も手がけていますが、直島の美術館などで「えっ！？…なんで  
 こんなところに雑草が…」とびっくりした方も多はず。



須田悦弘《チューリップ》2002年  
 高松市美術館蔵  
 ©Yoshihiro Suda / Courtesy of Gallery Koyanagi

作者はあまりにもリアルな草花の木彫で多くの人の  
 目を欺き驚かせてきましたが、実は多摩美術大学の  
 デザイン科のご出身。大学1年の時、基礎実習で木の  
 板を1枚渡され、干物をリアルに彫れと課題を与えら  
 れてスルメを彫ったのが最初。彫ってみたら面白くて  
 なかなかの出来映えに「おお〜と、木彫にハマったの  
 だそうです。木彫は完全に独学で、やればやるほど確実に上達していくのが面白いとか。須田さんは  
 リアルでありながらも、やはり木でなければ出ない良さみたいなものも出せれば、と考えているそうです。

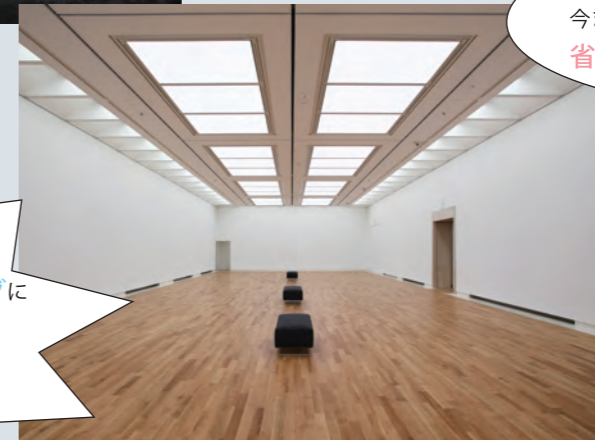
須田作品の特色はもちろんリアルさですが、どうやって見せるか、空間と物との関係性にも大きな  
 特色があります。ただ台の上に置いて見せるのではつまらない、まず空間を見てふさわしい作品を考える。  
 個人的には端っこや隙間が好きで、そういうところに展示することが多く、時に客が作品に気づかずに  
 通り過ぎることもあり、それも全然構わないとのこと。ある美術館の屋外展示で石の上に置いたところ  
 雨で流されたとか、またあまりにさりげなく展示されていて本物の雑草に間違われ、清掃人に掃いて  
 捨てられたこともあるとか…さあ、今回のチューリップはどんな現れ方をするのか…皆さんくれぐれも  
 お見落としの無いよう…。 [池田幸子]



誌上ギャラリートーク



Before



After

建物の中に入って、  
**展示室**をみてみよう。  
 ここは特別展などが開かれる  
 2階の展示室じゃ。



おや！  
 床がジュータンから**フローリング**に  
 変わり、天井の**照明も増えて**、  
 なんだか**明るく開放的**な感じに  
 なりましたね！

照明は**館内すべてLED**に変わり、  
 今までよりも**明るく**なったうえに、  
**省エネ化**もできており、一挙両得じゃ！



おっと、ここで  
 紙面が尽きてしまった。  
 続きは次回。

子どもたちが**アートに**  
**親しめる部屋**や  
**カフェ**などを  
 紹介するとしてよう。



わーい  
 次回も  
 楽しみ！